

ベートーヴェン 交響曲 第4番 変ロ長調

あまりに有名な交響曲第3番『英雄』と第5番『運命』に挟まれて、咄嗟には主だったメロディを口ずさむことが難しく印象の薄い交響曲第4番（大ファンの方がいらしたらごめんなさい）。

第3番の大成功により自信を深めたベートーヴェンであったが、第4番の初演時の人々の反応は極めて低く、後年の評価としてもベートーヴェンを敬愛していたワーグナーに「冷たい曲」と酷評されたり、ウェーバーにも最初のうちは好まれなかったりと散々だった。

第4番が作曲された1806年前後は、ベートーヴェンの爆発的創造期といわれるほど多忙を極めた時期で、ラズモフスキー弦楽四重奏3曲の作曲に取り組みながら、1ヵ月足らずでヴァイオリン協奏曲を書き上げるなど、同時にいくつもの楽曲の作曲を並行していた。好評を博した第3番のすぐ後には第5番及び第6番に着手していたものの、フランツ・フォン・オッパースドルフ伯爵から作曲の依頼を受けたこともあり、第4番を2、3ヵ月で書き上げ差し挟んだのでは、ともいわれている。じっくりと作曲に取り組むタイプのベートーヴェンにしては、非常に短い期間に作曲されたこの曲は、そんな背景も手伝ってか、後にシューマンがこの曲を、北欧神話の荒ぶる神々にたとえて「北国のふたりの巨人＝つまり第3番『英雄』と第5番『運命』に挟まれた清楚可憐なギリシャの乙女」と高く評価したにもかかわらず、現在に至るまで目立つ存在にまでは至っていない。

しかしそうした歴史的解釈とは別に、私見では、この曲にはベートーヴェンの心情が溢れているように思えないのである。ちょうどこの曲が作曲された頃には耳の不調に悩まされていたベートーヴェン。様々な金属の補聴器（ボンにあるベートーヴェンハウスには大小様々な金属の補聴器が展示されている）を試したが、実の音を聴くことが叶わず、頭の中で音を巡らせることしかできなくなっていた。一方で「不滅の恋人書簡」の受取人であった可能性が高いとされている、恋人ヨゼフィーネと熱烈な恋に落ちていた時期でもあり、私生活での充実ぶりも曲想に垣間見られる。

第1楽章

序奏部は、そんな彼自身の身体的絶望や苦悩を露呈するかのような変ロ短調の重苦しい冒頭に始まり、現実を懸命に振り払うかのような転調、その後はやっぱり希望を見出したいとの思いがほとぼしる主部へと繋がれ、澆刺としたティンパニのリズムに主導されて明るく軽快な曲調で展開する。二分の二拍子の主部は、全音符や二分音符が比較的多く、弦楽器の八分音符の刻みや木管楽器のリズミカルな動きが、華やかさの増幅に効果を発揮している。

第2楽章

2ndヴァイオリンによる「ミ♭」と「シ♭」だけのシンプルな符点のリズムが、夢見心地でゴンドラにでも揺られているかのような1stヴァイオリンの優雅なメロディを誘う。第二主題でのクラリネットのどこかもの悲しい旋律、再現部では展開部の不在を補うかのような劇的な表現も見られ、単なる穏やかな緩徐楽章にはしないベートーヴェンの創意工夫が表われている。終盤には第一主題のリズムがティンパニに置き換えられてソロ的に用いられるなど、斬新さも魅力だ。しかしながら、全体的には幸せ感に満たされて進行するこの楽章の重量感が、この交響曲を指して「乙女」といわしめる所以かもしれない。

第3楽章

冒頭からエネルギッシュな勢いで始まり、ヘミオラのリズム（三拍子から二拍子への変化）による弦楽器と木管楽器の軽快なかけ合いが展開する。トリオは交響曲第6番『田園』を彷彿とさせる牧歌的な曲調で進行し、メロディの木管楽器の間を縫うように差し挟まれる1stヴァイオリンの小さなモチーフは、ウィーンの森に遊ぶリスのよう。

第4楽章

陽気で軽快なフィナーレ。ファゴットを「天からの声」と形容するほど好んで多用したベートーヴェンだが、ここではヴァイオリンと同じ早回しのフレーズを割り当てている。技術的にとても難しく、アマチュア・ファゴット奏者の間では「えっ、誰が吹くの？」がお約束である。ついファゴットにだけフォーカスしがちだが、実はクラリネットにも同じことが要求されている。木管後列の見せ場もお聞き逃しのないよう、ベートーヴェンの人間模様にも思いを巡らせながらお楽しみ頂きたい。

(Vn N.T.)

ベートーヴェン 交響曲 第3番 変ホ長調「英雄」

プロメ：やあ、ボナパちゃん。今日はベートーヴェンの『英雄』交響曲を語るよ。

ボナパ：ご機嫌よう、プロメちゃん。『英雄』とはつまり、余の曲であるな！

プロメ：そうかな？確かに、ベートーヴェンはナポレオンを意識して作ったこの曲を『ボナパルト』と名付けようとしていたけど…

ボナパ：余の皇帝即位に「あの男も所詮は平凡な人間に過ぎなかったのだ。自己の野心のために全ての人の人権を踏みじめるだろう！」と激怒したというのが本当かどうかは知らぬが、『ボナパルト』の文字を穴が空くほど激しくかき消した自筆譜の表紙が残っているな。

プロメ：フランス革命が始まった（1789年）とき、ベートーヴェンは18歳。「自由・平等・博愛」を掲げつつ、その後、ルイ16世の処刑からの恐怖政治やら何やらでもうめちゃくちゃに混乱していく中、救世主のごとく登場したナポレオンに、革命の理想を見ていたのかもしれないね。

ボナパ：代わって付けられた表題は『シンフォニア・エロイカ』。正確には英雄「的」交響曲とでも言うのか。「ある偉大な人物の思い出を記念して作曲された」と記されているが、具体的な人物の描写というより、ベートーヴェンの中に喚起された英雄的な理想を表現した作品なのであるな。

プロメ：ベートーヴェンの交響曲は、1番（1800年）も2番（1802年）もその革新性が評判だったけど、この3番（1804年）はさらに大変な進化をしている。

ボナパ：当時としては実に規格外のとんでもない音楽だったのであろう！

プロメ：『第九』もまだ知らない19世紀初頭の音楽界にとって、演奏時間50分の交響曲なんて前代未聞だよな。「長大で大変に難しいこの作品は、きわめて手の込んだ造りの大胆かつ荒々しいファンタジーである」「この作品では行き過ぎや奇抜さがあまりにも多く、そのために見通しが悪く統一感が失われている」なんて演奏評に書かれているよ。

ボナパ：だが、ベートーヴェン本人は、後の交響曲と比べてもこの3番を高く評価している。それだけ画期的な作品だったということであるな。

プロメ：ではボナパちゃん、**1楽章**から聴いてみよう。

ボナパ：ダンッ、ダンッとわずか2音の序奏。なんという潔さであろうか！

プロメ：この主和音から分散和音のテーマが紡ぎ出されるんだけど、それだけで終わらずミ♭-レド♯と半音下降するのが、なんかいいよね【譜例1】

ボナパ：曲が進むにつれ執拗なスフォルツァンド（その音だけを強く）のアクセント付け！3拍子の2拍目や、あえて2拍子に崩した（ヘミオラ）裏拍の強調が実にロックである！極めつきは、提示部終盤の、6発の打撃！

プロメ：展開部がまた破格の長さでドラマチックだね。激しい不協和音で緊張感が頂点に達した後、原調から遠いホ短調で全く新しいテーマが出てきて、いったいこの音楽はどこへ行くんだろう、つてなる。

ボナパ：再現部に戻る直前、ホルンの弱音でテーマが回帰するところで主和音と属和音を同時に鳴らす大胆さよ！これは和声的に間違いではないか、と後世まで物議を呼んでいるな。

プロメ：コーダ（終結部）がまた、第二展開部といわんばかりの規模で盛り上がるね。

ボナパ：いやはや、もう1楽章だけで一大作品であるな！

プロメ：**2楽章**の有名な『葬送行進曲』は、交響曲ではたぶん史上初。実は、ピアノソナタ12番（1801年）の3楽章を『ある英雄の死を悼む葬送行進曲』として、すでに実験済みなんだけどね。

ボナパ：1楽章とのあまりの落差に、感情がついていくのが大変であるな。

プロメ：葬送の太鼓っぽいコントラバスのリズムの上に、ヴァイオリン、そしてオーボエが奏でるハ短調のテーマが続いていく。

ボナパ：しかし、長調に転じた音楽が、何という栄光の賛歌となっていくことか！

プロメ：短調に戻ったと思ったら、フーガで展開されていくところの悲痛さが胸に刺さるね。

ボナパ：そして、最後、音楽がティンパニの一打に収束する瞬間に、なぜか永遠を感じるのである…

プロメ：**3 楽章**は一転、アクセントがピリッと効いた痛快なスケルツォ楽章だね。

ボナパ：そして何と云っても、トリオ（中間部）のホルンに心躍らされるな！

プロメ：ベートーヴェンの交響曲は『第九』以外みんなホルン2本だけど、この3番では、ホルンを3本にして、全曲にわたって実に効果的に使っているよね。

ボナパ：さて、**4 楽章**であるが、プロメちゃんよ、華々しい序奏の後、おもむろに始まるこの音楽は…？

プロメ：最初にバスのテーマが登場。そこから変奏が始まり、3つ目の変奏でバスのテーマの上に加わるのが、オーボエが奏でるプロメテウスのテーマだね【譜例2】。

ボナパ：バレエ音楽『プロメテウスの創造物』（1801年）であるな。ギリシャの神プロメテウスによって粘土から造られた人形たちが、理性や感情を与えられて人間になっていく物語。

プロメ：序曲と16曲のバレエ音楽が作られた中で、終曲のテーマがこれ。ベートーヴェン自身も気に入っていたみたいで、ピアノのための変奏曲Op.35（1802年。別名『エロイカ変奏曲』）などにも使っているね。

ボナパ：このピアノの変奏曲もなかなか聴き応えあるが、この4楽章では、バスのテーマのフーガ的な展開を挟みながら白熱していくところなど、ただの変奏曲を超えた面白さがある！

プロメ：この楽章、最初はバスのテーマが優勢だけど、変奏を経るにつれだんだんプロメテウスのテーマが主導権を取っていく構造になっているんだよね。

ボナパ：さながら、プロメテウスから生まれた創造物が人間として成長し、自立していく過程を見ているようだな！

プロメ：うまいこと言うね、ボナパちゃん。人間の可能性を信じ、ボナパルトに理想を見いだしたベートーヴェンの「英雄的」なるものへの賛歌、それが『英雄』交響曲ってことかな。

ボナパ：であるな、プロメちゃん！ボナパルトとプロメテウスの申し子、とも言うべきこの交響曲が、現代の人間たちにも喜びを与えるものであるとすれば、これほどうれしいことはないのである！

(Fl. T.T.)

【譜例1】

(Vc)

p

【譜例2】

(Ob) *dolce*

(Vc, Cb) *pizz.* *cresc.* *sf* *decresc.* *p*